

氏 名 木戸 雄一

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第 269 号

学位授与の日付 2021年3月 24日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 一九〇〇年前後の地方青年における文筆活動の研究  
——文章回覧誌を中心に——

論文審査委員 主 査 山本 和明  
日本文学研究専攻 教授  
青田 寿美  
日本文学研究専攻 准教授  
野網 摩利子  
日本文学研究専攻 准教授  
谷川 恵一  
総合研究大学院大学 名誉教授  
山田 俊治  
横浜市立大学 名誉教授

(様式3)

## 博士論文の要旨

氏 名 木戸 雄一

論文題目 一九〇〇年前後の地方青年における文筆活動の研究  
— 文章回覧誌を中心に —

本研究は、一九〇〇年前後の地方青年の文筆活動の多様な方向性をとらえることで、その「文学」の領域を明らかにし、さらに彼らを「文学場」への新たな参入者と位置づけることで、それに応答せざるを得なくなった既成の「文学」の変容について分析することを目的とする。

本研究では地方の文章回覧誌に着目する。一九〇〇年代までの地方では、文芸テクストを書くという営みは、文章修行の枠内にあることが多かった。学問が立身出世の要となつて以来、その基盤となる文章の修行は全国的に行われたのであり、各地で文章を書くことを目的とした会や結社が生まれ、活動していた。それらの多くは文章回覧誌を発行し、同人間で文章を評し合っていた。明治中期の文学青年層の活動を分析するために参照されてきた、『穎才新誌』『少年世界』『中学世界』といった広いジャンルの投稿を扱う雑誌や『文庫』『新声』『明星』といった文芸ジャンルとしての「文学」中心の投稿雑誌は、投稿作品の取捨選択や雑誌のジャンル編成によって投稿者が書く文章を大きく規制した。しかし、その規制は青年達の書く行為すべてに及んでいたわけではない。その上、地方では文章回覧誌に参加できる文章能力を持った者は限られており、必然的に文芸愛好者にとどまらない書き手が集まることになった。文章回覧誌には、Literatureとしての「文学」へと必ずしも向かわない文章もまた多く含まれている。文章回覧誌に掲載された多様なテクスト群を、「文」もしくは「文章」と呼ぶべきであろう。文章回覧誌の研究は、明治期の青年達による文章を書く行為を、文学研究の領域を超えたより広範な言語活動としてとらえ直す契機となる。

中心となる資料は、福島県耶麻郡関柴村で一九〇〇年前後に活動していた「作文会」「文学研究会」の運営資料と、回覧誌である。従来、特に投稿雑誌の主要な読み手＝書き手とされてきたのは中学生だった。『中学世界』の研究などを通じてそのような階層の分析は進んでいる。しかし、「文学」を読む＝書く地方青年は中学生だけではない。『文庫』のような大きな投稿雑誌を見ても、その中に高等小学校卒や、師範学校、または講義録などで自学する地方青年が多く見出せる。「作文会」「文学研究会」の会員は高等小学校卒の学歴であり、師範学校への進学を希望する者、役場に勤める者、そして家業の農業に従事する者など、地域に滞留する者が多かった。本研究では、中学校というエリートへつながるコースに乗り、やがて「近代文学」の主要な読み手＝書き手となった階層とは異なる視座から、地方青年の「文学」を検討することで彼らの「文学」の領野をより広くとらえたい。

本研究は二部に分かれている。第一部では、一八九〇年代から一九〇〇年前後の地方の「文学」状況を(1)「文学」の領域(2)知識の商品化(3)垂直と水平の関係性、という三点について分析してきた。

一八九〇年代の地方文学雑誌の文学の領域は文芸・言論・作文の三つの系譜が入り交じっていたが、一九〇〇年代には文芸を他の系譜から切り離そうとする文学雑誌と、三つの系譜を維持する「文学」雑誌が現れた。文芸としての文学と広義の「文学」が領域として重なりつつ区別されていたが、地方の読み手＝書き手の青年達は、時にはそれらにまたがる形で文筆活動を行っていた。

「知識の交換」が地方青年の結社や雑誌の常套的な文句となっていた。このようなスローガンが可能にしたのは、百科全書的な体系化されていない知識が商品化されて多量に供給されたからである。いわゆる「剽窃雑誌」はその役割を果たした代表的な出版メディアであった。

地方に新たに現れた文を書き知識を交換する青年達は、投稿雑誌の中で文章の添削という編集者と読み手＝書き手の垂直の関係と、読み手＝書き手同士の水平の関係とを経験した。垂直の関係性は「文学」を個人的な研鑽の営みにする一方、水平の関係性は「文学」を議論や談話の中で生成するものにする。議論を中心にした投稿雑誌は地方に多くの支部を生み、地方での対面を含んだ文筆活動へとつながった。

これらをふまえて、第二部では地方の「文学」青年達の実態に迫るため、文章回覧誌に着目した。文章回覧誌は公刊雑誌に比べ、稚拙な文章や同人間の生々しいやりとりを垣間見せてくれるメディアである。特に、回覧中に付される批評からは、会員の文章に関する意識が決して一様ではないことがうかがえると共に、文章回覧誌が余白の批評による対話や議論の場であることがわかる。投稿雑誌の添削を中心とした垂直な関係性に比べ、文章回覧誌は対等な仲間内の水平的な連帯関係に基づいている。

対象とした福島県喜多方地方の「作文会」「文学研究会」は高等小学校を卒業した後、地域に滞留しながら教員・役場・農業に従事する者が多かった。しかし、それらは仮の身分であり、彼らは異なるライフコースの選択の可能性を多分に秘めた可能態であった。その動態をとらえるためにここでは学歴や職能による会員やテキストの分節化とは異なる分析モデルとして、複数の「志向」が回覧誌・会員・テキストに混在しているという見方を採用した。「志向」とは立場や行為を規定する特定の傾向である。複数の「志向」が回覧誌・会員・テキストの中に折りたたまれており、条件によって前景化されたり統合されたり併置されたりする。回覧誌のみならず、会員個人や、テキストの内部にもそのような「志向」の複数性がある。「作文会」「文学研究会」については、起源にさかのぼって字義を解釈する「訓詁」の志向と、良心に基づいた行動を重視する「実践」の志向に着目して分析を試みた。

「作文会」「文学研究会」は教員を中心に「訓詁」の志向が強かった。これは本来水平的な回覧誌の会員の間、文化資本の格差による教える側と教わる側の垂直の関係を生み出した。その文化資本の差異は和歌をはじめとした地域の名望家層の教養にふれる機会と、図書館の購入に拠っていた。文章回覧誌は図書館の貸借の情報を流す場であると同時に、手持ちの古典文を筆者により共有する場でもあった。「訓詁」の志向を強く持った菊池研介は、国文の研究と書物の蒐集を行っていたが、教員を退職し郷土史家になった。地方で「訓詁」志向を持った者が地域の文献を渉猟して郷土史家や民俗学徒になる例は全国的に広がっており、近代において地域の教養を支え続けた。

「実践」の志向は他者への働きかけを前提とするため、垂直、水平いずれの関係性にコ

ミットするかによってその「文学」のありようも変わってくる。宇津木忠次郎は教化という垂直の関係性を重視した。地方に滞留する青年に対して農本主義的な立場から呼びかけの文を書き、また「美文」・和歌・寓話など多彩なジャンルを駆使して青年の教化を図った。

一方、宇津木忠介は出郷して関西学院に在学し、くだけた書き流しの文章で親しみを演出すると同時に、議論を行う平等で水平的な場を文章回覧誌に求めた。青年同士の連帯を演出するこのような言説は、しかし都市と地方の格差に直面する会員には受け入れられず、格差を無化することはできなかった。

「訓詁」「実践」の間で揺れ動きつつ、内省的に自己を語る自己語りの「文学」も書かれた。風間悌三は和歌・新体詩・「美文」・小説などで伝統的な美的モデルや既存の物語の作中人物に自己仮託しながら、「自己語り」を行っていた。ここには自然主義流のありのままの自己とは異なる、自己語りの形式があった。

これら複数の「志向」は文章回覧誌を議論の空間にした。余白を用いた言葉の応酬の中で、自己の立場を使い分け、複数の「志向」を抱える者もいた。

本研究によって、一九〇〇年代の地方青年の中にある複数の「志向」とそれにともなう多様な「文学」をとらえることができた。ここには田山花袋が描くようなロマン主義から自然主義へという文学史の領域を超えた「文学」の広がりがあった。

## 博士論文審査結果

Name in Full 氏名 木戸 雄一

Title 論文題目 一九〇〇年前後の地方青年における文筆活動の研究  
— 文章回覧誌を中心に —

木戸雄一氏の博士学位請求論文『一九〇〇年前後の地方青年における文筆活動の研究—文章回覧誌を中心に—』(以下「本論文」と称す)は、中央の文壇に対峙される一九〇〇年前後における地方青年たちの文芸活動が、地域の間関係のなかでより広い範囲の文筆活動(氏はこれを「文学」活動と定義する)・社会活動と並行・交差して行われ、多様な方向性を備えていることに着目したものである。当時の投稿雑誌の誌面構成や、彼らが編んだ文章回覧誌の内容を、現存資料の悉皆調査に基づき詳細に分析することで、彼らが運営・投稿・回覧した文章雑誌が、議論や談話の場としてどのように機能したのか、同人達による、個々の「文学」を模索した動態を丁寧に掘り起こし定位化したものであり、中央文壇的文芸とは異なる、地方における「文学」領域の実態を解明し、既成の文学史が見落としてきた「文学」領域に着目する意欲的な研究となっている。

本論文は、序章のあと、本論二部構成となっており、総括として終章を配する。

導入としての序章では、日清戦争後の投稿雑誌が文芸中心、自由な表現の場へと変容したことを、田山花袋『田舎教師』『東京の三十年』を例に確認し、規範的な文章修行からロマン主義、そして自然主義へという自己の文学的遍歴に沿った形で、花袋が一九〇〇年前後の青年達を捉えており、その花袋の文学史観は今なお近代文学史のメインプロットとして命脈を保っていると位置づける。その一方で、『田舎教師』のモデルとなった人物の文筆活動を見る限り、文学雑誌と「文学的のものではないらしい」雑誌に、文学を語らう仲間がそれぞれ関わっていること、地方青年の文学活動が地域の間関係の中でより広い範囲の文筆活動と交差して行われていた可能性を指摘し、地方青年の実態は花袋の指摘する一九〇〇年前後の青年達の枠に収まらない、「ロマンチック」ではない青年達も含まれており、そうした地方青年による文筆活動の多様な方向性を捉え、その「文学」の領域と実態の解明を本論文の目的とする、と述べている。中央-地方の文化的階層秩序を前提とした研究が大半を占め、近年盛んに行われるようになった投稿雑誌の研究においても、結果的にこうした研究のスタンスが維持される点を批判的に検討するところから木戸氏の研究は出発しているのである。

この目的に沿い、本論第一部「地方の「文学」状況」は、①中央文壇で刊行された投稿雑誌等の分析を通して一九〇〇年前後の地方青年における「文学」の領域を確認、②情報の流通状況(中央からみた知識の「商品化」)の把握、③投稿雑誌にみる文章の添削を担う編集者と読み手との「垂直の関係」とは異なる、読み手と書き手同士の「水平の関係」の存在、に注目する三章構成からなる。

第一部第一章「一八九〇年代～一九〇〇年前後における地方の文学雑誌」では、『東洋文学』などを例に、一八九〇年代の地方「文学雑誌」の特徴を、中央の雑誌にみる専門化や細分化がなされにくく、地域で雑誌に寄稿できる人材も限られ、ために「文学雑誌」を名乗りながらも広義の「文学」を掲載することが多いとした。一九〇〇年前後に至り、地方にも新しい文芸テキストの書き手が育ってきたが、地方文学雑誌は自由な表現の場であったとは必ずしも言えず、文学の雑誌は実業までも包摂しながら多様な文を許容するものであり、地方の読み手＝書き手が、文学と「文学」との間で文筆活動をするという、理想と実態の狭間を往来しつつ展開したことを、地方の投稿雑誌の分析を通して考察する。

第二章「知識の商品化」では、一八九〇年代以降の地方の結社や雑誌には必ずといって良いほどに「知識の交換」が謳われるが、本章では特に中央から地方への学術情報伝達の便宜という観点から、学術雑誌の論文を許諾なく集めた「剽窃雑誌」などでは、地方在住者がその有力な購読者と見なされ、中央から地方へ、一方的に知識を商品として供給する商法が、都市と地方の情報格差のもとで成立し、情報が流入し消費される様相を説き明かす。

第三章「議論・添削・談話」では、参加型メディアとしての投稿雑誌の二つの側面、すなわち添削という行為を巡る投稿者と選者・編集者との間に成り立つ「垂直の関係」と、議論や談話という投稿者間の「水平の関係」とが交差する場と捉え、特に口語文体によってコミュニケーションが行われていた私的な談話の場で生成される水平的な連帯は、より近い距離に住まう投稿者同士の親密な関係構築への欲求を招来し、地方における支部の結成を促すという連帯意識の拡充メカニズムを明らかにする。

第一部では、中央の雑誌から地方の読み手達が如何に情報を得たか、その誌面から獲得した水平的な連帯の有り様などを考察したが、第二部「地方文章回覧誌の「文学」」は、地方青年の「文学」活動により密着し、「文学」青年達の実態に迫り考察するため、彼らが編んだ文章回覧誌を同人の文章に即して分析し、「導入」を置いたうえで六章構成（第四章～第九章、通し番号での章立）からなっている。回覧誌を研究資料とするには多くの物理的制約があるが、回覧誌に集う会員の情報は地方の歴史文書に含まれる場合、詳細に把握出来る可能性があり、会員の動向を追うことによって回覧誌によって獲得されたりテラシーの通時的な追跡も可能であるとし、資料を丹念に読み解き考察を加えている。木戸氏の研究において評価すべき点は、地方で出された回覧雑誌を発掘することによって、研究対象としての空間そのものを中央から地方の文学場へと移すことを通して実践したことにある。

具体的には福島県喜多方地方の「作文会」による「文の友」「文の千草」と、その後継である「文学研究会」による「深山の花」を対象に分析する。第二部第四章「「作文会」「文学研究会」はその回覧誌としての概要を纏めたものである。いずれも資料体としては完全ではないが、残された資料を駆使し、周辺資料にあたるなどして会員の消息や発行状況を明らかにした詳細且つ堅実な文献調査の成果が纏められている。それに基づき第五章から第八章（第五章「文章修行の中の「文学」」、第六章「教化の「文学」」、第七章「連帯の「文学」」、第八章「地方青年の生活と「自己語り」」）では、代表的な会員の傾向を取り上げ、回覧誌における様々な志向、すなわち文章修行という目的から起源にさかのぼって字義を解釈する「訓詁」や、知識よりも良心に基づく行動を唱えた「実践」等をはじめとする多様な志向が混在していることを明らかにした。投稿雑誌の添削を中心とした垂直な関係に比して、

文章回覧誌は対等な仲間内の水平的な連帯関係に基づいているが、時には自分の価値観を相手に植え付けようとする垂直方向のコミュニケーションを基調とした「教化」と「連帯」が交錯する場として、同人間の生々しいやりとりを垣間見せてくれるメディアでもあった。

第八章「地方青年の生活と「自己語り」」が纏めるように、既存のテキストに自己を仮託し、「ありうべき自己」を既存の枠組みで語るという「自己語り」の様相などは、地方に集う個々の読み手＝書き手の「文学」という、従来の文学史が見落としてきた文学場の営みを丁寧に掬い上げ、俎上に載せたものとなっており評価に値する。第九章「議論空間としての文章回覧誌」では、代表的同人間で起こった論争を取り上げる。地方青年の複数の「志向」は、誌面の余白を用いた言葉の応酬の中で、自己の立場を使い分けていくのである。終章は上記で述べた一部二部を総括するものとなっている。

本論文による貴重な地方文章回覧誌とその関連資料の発掘と読解・分析によって、読み手＝書き手である地方青年が多様な文筆活動による交流を行い、個々の「文学」を模索した動態を丁寧に掘り起こし定位する試みは、学術的にも高い意義が認められよう。

課題も残されている。地方文章回覧誌の投稿者たちの経歴を詳察した功績も大きいですが、論者自らがいう「回覧誌の研究は構成員を注視しその動態を観測すること」が先立ち、ともすると「文学」の領域を明らかにする「文筆活動の研究」ではなく“経歴の研究”に力点が置かれていると見える点である。また第一部第二章に挙げる専門雑誌や他の投稿雑誌についての理解と検証が具体性を欠き、俯瞰的に述べる上での更なる調査を要するものと考えられる。より広い地域の資料にもこうした分析モデルが有効であるのか確認することなども残された課題であろう。しかしながら、こうした点は、本論文の提示する調査と検討の成果があるがゆえに顕在化する問題でもあり、本論文の価値を減ずるものではない。むしろ文学史と文化史に新たな研究領域をひらいた画期的な論文となり得ていると言える。

以上により、審査委員会は、本学位請求論文が博士の学位を授与されるにふさわしい内容を備えていると判断し、全会一致で合格と認めた。